

一九九九年 地城 要滅

桐山靖雄



一九九九年
地球
滅亡
桐山靖雄

平河出版社

一九九九年地球壊滅

一九八八年十二月十日 第二刷発行
定価二二〇〇円

著 者 桐山靖雄 ©1988 Seiyu Kiriyama Printed in Japan.

発行者 堤たち

デザイン 大久保友博

発行所 株式会社平河出版社

印刷所 凸版印刷株式会社

T 102 東京都千代田区準町三―二 電話(〇三)二六三―四八八五 郵便振替東京一―二七三二四

本書の引用は自由ですが、必ず著者の承諾を得ること。密教の修行法に関してはとくに無断使用を禁じます。
著者独自のシステムですので、間違っって伝えられることを恐れるためです。

ISBN 4-89203-156-9 C 0015 ¥ 1200 E

一九九九年 地球壞滅 ■ 桐山靖雄

—
平河出版社

カバー写真
©清水誠司（提供ボンカラー）

一九九九年七月・地球

一九九九年七月二十七日。

地球が震撼しんかんした。

世界各国五カ所の原子力発電所が爆破されたのである。世界はパニックに陥った。

おそろしい悪夢のような恐怖の日々のはじまりであった。

アメリカ、フランス、フィンランド、そして日本。この四カ国・五カ所の原子力発電所が爆破されたのである。世界はショックで立ちすくんだ。

予想もし得ない大惨事が起きたのだ。

もっとも、その少し前から、なにか恐ろしいことが起きるぞという予感が、一部で感じられてはいたのである。

それは、密教・神智学のごく一部の指導者^{グル}たちの間で、ひそかに囁かれていたのだった。

チベットとインドの国境にまたがるヒマラヤ山脈の奥地に、遠い昔から、星をまつる聖者のグループがあった。星をまつるといっても、星を神^{あが}として崇めるというのではない。「ターラー・ダッタドゥリシュティ」サンスクリット語で「星を見まもる者」というその名称の通り、古代から、天体観測をつづけている聖者たちであった。

太陽・月・惑星等の星座の動きは、地球につよい影響をあたえるのである。その配列により、星々は固有の波動、震動、磁波を地球に降りそそぐ。それは地球上のあらゆるものに影響し、人も、物も、それにより動かされる。地球と

人類の歴史は、すべて、この星座の配列が生み出したものだといってもよいのである。

そういうと、地球から遠く離れた星の運行上の変化が、地球と人類に、そんな大きな影響をあたえるなど、とうてい考えられない、占星術などという非科学的な体系が勝手に考えている一種の迷信にすぎない、そういう人がいるかもしれない。

決してそうではないのである。

われわれの住む地球は、だれでもが知っている通り、宇宙から降りそそぐ宇宙線の雨にさらされている。

宇宙線は、われわれのところに届くまでに大気中の原子と衝突して、その力はかなり弱まる。しかし、現実には、一分間に一センチ平方六五万粒という信じられないような数の見えざる粒子が人体を突きぬけ、頑強な鉛のバリヤーをも素通りし、一〇〇〇メートルの海底にまで到達しているのである。

この領域における世界的な権威であるオックスフォード大学のヤコブ・オーグスター教授はこう語っている。

「宇宙線は二つのはたらきを持っている。一つは突然変異を起こすこと、つまり遺伝子に変化を起こすことであり、もう一つは、組織を破壊してしまうことである」

と。そうして、この宇宙線は、星体の運行につれ、微妙な変化を起こすことが、専門的に知られている。星体の運行上の変化が、地球と人類にそんな大きな影響をあたえるなどとは考えられない、などというのは、無智な者のいう言葉だということが、わかるであろう。

「ターラー・ダッタドゥリシュティ」の聖者たちは、星座の動き、配列を日夜観測して、地球の動きを見ているのである。そうして、地球に重大な危機が予見されたとき、その危機をひろく世につたえることを使命としている聖者たちなのであった。

黄道帯アクウェーリアスの大破壊

一九七〇年に入ってから、聖者たちは緊張の度を高めつつあった。

星座がいよいよ、宝瓶宮アクウェーリアスの時代に入ったと観測されたからである。

というのは、密教・神智学の占星術で、昔から、宝瓶宮の時代には、地球的な大変動、大改革が起きるとされているからである。

たとえば、クンダリーニー・ヨーガの研究者として有名であった三浦関造氏の文章を引いてみよう。

三浦氏は、その著書『真理の太陽』で、古代インドの聖典『ヴァガバッド・ギーター』、また、フラヴァツキーの『秘密教義』シークレット・ドクトリンその他を引用して、こうのべているのである。

『聖典ギータからの引文は、宇宙の周期率的变化を示す。地球も人類も、この大変化からのがれることができない。われらはいま、この大変化期に遭遇している。この大変化は、過去の産なる文明一切を破壊して、新しい文明を生みだす。

われわれは今、二重の周期率の大破壊期に直面している。一つは、二〇万年ぶりにめぐってきた周期率的破壊である。二〇万年前には、アトランティス大陸が、高度に発達した文明を載せたまま、大西洋の海底に没した。われわれの時代は、アトランティス海底沈没のカルマ的再来だと、チベツトで発見された古代の大予言書が告げている。

もう一つの周期率的破壊は、二万七五〇〇年ぶりにまわってきた黄道帯アクウエーリアスの支配力がふるう変化である。

過去二五〇〇年（仏陀やキリスト以来）はピッセス時代であった。黄道帯アクウエーリアスがあらわす大破壊力は、ピッセス時代二五〇〇年間に

建設された文明をことごとくぶちこわして、協力と統一によるあらたな精神文明へと、人類を駆りたてるものである。二重に襲ってきた大破壊力については、神秘的な予言者ばかりでなく、今日の或る科学者たちがすでに気がついている』

このことについて、少し説明しよう。

占星術では、太陽、月、惑星の通る道を、「黄道」あるいは「黄道帯」という。そしてこの黄道の座標を示す十二の星座を、「黄道十二宮」とよんでいる。

宝瓶宮アクウエリラスというのは、この十二宮の中の一つの星座であるが、この十二宮の

起点は春分点しゅんぶんてん（地球上で黄道が赤道と交わる2点の内、太陽が赤道の南側から北側に横切る点）で、それを、「おひつじ座」の零度と定める。以下、黄道上を、東向きに三〇度ごとに「おうし座」「ふたご座」……「水がめ座」「うお座」というように、天空一周三六〇度が十二等分されている。

春分点は、一つの星座を、二万五八〇〇年÷12の、約二一五〇年で通過する。つまり、一つの宮（星座）の時代が、二一五〇年つづく、ということである。

そこで、それでは、現在、春分点はどの星座を通りつつあるのかというと、これが、黄道上の「うお座」から「水がめ座」に移りつつあるのである。専門家は、十数年前から、すでに「水がめ座」に入ったと観測している。この「水がめ座の時代」を、専門用語で、「宝瓶宮^{アクウエリヤス}の時代」とよぶのである。

これまでの約二〇〇〇年間は、「うお座^{ピッセス}の時代」であった。春分点が、「うお座」を通過していたからである。三浦関造氏が、「過去二五〇〇年はピッセス時代であった」と書いているのは、このことをいっているわけである。

「うお座」の特徴は、宗教と神秘と直観である。

じっさい、その通りで、この時代のはじめに、キリスト教が成立し、その後、ヒンドゥー教、イスラム教が起り、また仏教も発展して、宗教が社会の規範をつくりあげた。人びとは霊界の存在を認識し、神秘的なものに興味を示し、

この時代の末期にはオカルトがはやり、それに追従して迷信もはびこった。

これから二〇〇〇年以上、宝瓶宮（水がめ座）のバイブレーションが地球上に降りそそぐ。世界はどう変わっていくのか。

三浦関造氏は、「大変化と大破壊だ」と断定している。

たしかにそれもある。

水がめ座の特徴・特質をあげてみよう。

「権威への反抗と革新」「自由な発想と個性の尊重」「精神の昂揚と拡大」「発明と科学」「破壊と変化」

以上が、水がめ座の特徴・特徴である。

この中でいちばん気になるのは、「破壊と変化」だ。革新のための破壊、それが、とり返しのつかない大破壊、大暴走となるおそれが非常に強いのである。「ターラー・ダッタドゥリシュティ」の聖者たちが、緊張の度を高めつつあるのは、このためなのである。

一九六二年・ヒマラヤ・秘密僧院

数年まえから、過激で狂信的な宗教団体が目立ちはじめていた。

「これは危険な兆候だ」

聖者集団「ターラー・ダッタドゥリシュティ」のリーダー、老タゴールは、一九九六年に入って間もなく、ある朝、そうつぶやき、聖者たちを集めて、こういった。

「至急、これら教団のリーダーたちの星座表を作製せよ」

そう命じながら、老タゴールは、三十数年まえのことを思い出していた。そのとき、ちょうど五十歳になったタゴールは、師のあとを継いで、集団のリーダーになったばかりのところであった。タゴールを後継者に指名した師は、死の床に、かれ一人を呼んで、一枚の紙片を示した。

「これは——？」

「いつの頃からか、われわれに伝えられている星座表だ。三枚ある。これはその中の一枚の写しだ。あとの二枚は、わしの私室の手箱の中にある。ここにその手箱のカギがあるが、あとの二枚は、おそらく、おまえの生涯において見る必要はないだろう。というのは、この三枚の星座表は、これから一〇〇〇年の間に、この地球上に起きる三つの異変を予言したものなのだ。最初の異変は、いまから一〇〇〇年の間に起きる。この星座を見よ」

タゴールは紙片を受けとった。

「アクウェーリアスに入っておりますね」

「そうだ。アクウェーリアスに入って、おそらく、四、五十年のちのあたりじやろう」

タゴールはじつと星座を見つめた。

「この星ですか？」

師は無言でうなずいた。

「見たことのない星ですね。どこから来るのでしょうか」

「大異変の起きる一年まえにあらわれ、三カ月で消える。われわれの持つ秘密技術でしか見ることでできない星だ。ぜったいに見落としてはならぬ」

「大異変と申しますと、どのような——？」

「それはいえぬ。いや、わしにも分らぬ、といったほうがよい。しかし、これだけはいえる。わしは、さきに、こういったな。あとの二枚は、おそらくおまえの生涯において見る必要はないじやろう、と。それを、こう訂正しよう。それはおまえだけではなく、あるいは、地球上の人間のだれ一人も見する必要、いや、見ることができなくなっているかもしれない、ということだ」

「すると——」

と、タゴールは息をのんだ。

「人類絶滅ですか？」